

いろは文字鉾くさり（その二十五―ことばの徘徊）

浜尻成泰 

いろはにほへと ちりぬるを 色は匂へど 散りぬるを

わかよたれそ つねならむ 我が世誰ぞ 常ならむ

うゑのおくやま けふこえて 有為の奥山 今日越えて

あさきゆめみし えひもせず 浅き夢見じ 酔ひもせず

（ん）

以呂波の回路 浪漫生む母

俳句よき国 日本語笑顔

星降る里へ 紅の夕日と

豊の月満ち 鎮守の祭

林檎と子犬 塗り絵ぬるぬる

瑠璃は薄青 女の腕輪

輪は左とか 薫りの妹よ

四隅取られた 大石を切れ

連絡絶つぞ その目は一つ

憑き物の種

根は中華とな

謎の菌から

楽事潰えむ

惨き現象

ウイルス猛威

居る我々の

望みあれおお

音のよろしく

車走るや

山海の様

まほらいや重け

景色に歌ふ

古き温泉はここ

今宵月冴え

得たり顔にて

手に取るはああ

熱き酒ささ

杯に雪

君眸燃ゆ

齋つ表紙の目

捲る古歌読み

見よ万葉詩

四季の万絵

酔語に笑まひ

人知らずとも

文字鉤成せ

千の句ぞ寄す

令和二年（二〇二〇年）六月十三日

女の腕輪をみな 古語では「をみな」は若い女性とか美人。「をんな」は成人女性、妻。

「をうな」も若い女性。年をとって老女になると「おみな」「おんな」「おうな」となる。

輪は左とか 古代日本では左を右よりも貴んだ。万葉集卷九一七六六に、吾妹子わがもこは釧くしろにあらなむ左手のわが奥の手に纏まきて去いなましをくしろ（釧は腕輪）、がある。

古事記で伊邪那岐神いざなぎのみことが禊みそぎをした時も左が先、右が後だった。

根は中華ちゆうくわとな 根は物事のはじまり、根源。「とな」は問い返す語。伝聞を確かめるときに使う。「なに此の絵が抜け出て言葉を交したとな」

まほらいや重しけ 〓 「まほら」はすぐれたよいところ。まほらま。素晴らしい景色が次から次へと楽しめる、これぞドライブ。

熱き酒さささ 〓 「ささ」はさあさあと酒をすすめているのだが、酒そのものを指す女房詞でもあるそうだ。

斎ゆつ表紙の目 〓 「斎ゆつ」は清らかな、神聖な。ここでは大切なとか、愛用の、というような意味。折に触ひれて繻むすく万葉集の本を指す。

人知らずとも 〓 言葉面ことばづらだけ万葉歌から拝借。白珠しらたまは人に知らえず知らずともよし…

後記

また想像空想交じりの、とりとめのないもの。意味のつながりはなしに、単なるしりとり形式（昔の「その二」のように）でいこうとしたのだが、どうも意のままにはならない。結局前作のようなものか。最後に「文字鉤成せ^{もじくぎょう}」とは言っているが、もう限界だ。

今年は春から新型コロナウイルスで世界中が大変。去年十二月、中国武漢市で発生、瞬く間に広まり、三月半ば百か国以上が感染してようやくWHOが「パンデミックとみなす」と発表。日本では三月四月が一番ひどく、学校は休校続き、プロ野球も大相撲もできず、学校がないから甲子園の高校野球も総体もだめ。本年の東京オリンピックパラリンピックも来年に延期。STAY HOMEで街に人無く、いても皆マスクマスクでソーシャルディスタンス、どこかよそよそしい。

（付）「齋^うつ表紙の目」で言及したのは、五十数年前、道頓堀の古書店「天牛」で手に入れた赤茶色の岩波日本古典文學大系萬葉集全四巻。いくらで買ったのかわからないが、定価は第一巻七百円、あとの三冊は八百円。学生最後の年、思い切って大枚をはたいた。

令和二年（二〇二〇年）六月十四日